

# カレンダーを飾る写真を撮るには

飯能支部 高野 末男

このたび日本ツバキ協会では2013年の素敵なおカレンダーが出来上がりました。協会の設立60周年に合わせてのスタートで、誠に嬉しい限りです。今回は準備期間が短くて応募できなかった方も、これから迎える待望の椿シーズンに、ぜひ大好きな花を撮り、2014年用に応募しましょう。

協会の依頼で、2014年のカレンダーに挑戦される方のために「私のつばき撮影法」を書いてみました。基本的に初心者を中心に、私が日頃気づいていることを書いています。上級レベルの方はすでにご存知のこと、違う考えのこともあるかと思います。その点はご容赦下さい。

## 1. 花の選びかた

花には最も美しい旬の時期があります。自分の近くにある椿なら、蕾が開き始めたらよく観察して、シベが美しい時期を選びましょう。花びらが満開を過ぎるとシベの色が次第に変色してきます。満開になる寸前から観察して撮りましょう。

## 2. 天候



菊月（太陽光）



菊月（日陰）

花びらの色を見た目どおりに出すには「薄曇」の日が一番いいようです。

晴れた日なら出来るだけ朝のうちに撮りましょう。太陽が真上に上がると花びらの光の反射が激しく、PLフィルターを付けないと反射が見苦しくなります。どうしても真上の太陽の時間帯にしか撮れない場合は、白ビニールの傘や

レフ板で光を和らげて撮るとよいでしょう。

ホワイトバランスはRAWで撮られる方は問題ないですが、JPEGで撮られる方は、天候に合わせたものを一枚、オートで一枚撮ると、自分の見た目に近い色の方を選ぶことができます。

### 3. 順光、斜光、逆光

光の具合で写真は見る人に違った感じを与えます。撮る花に適した光はいろいろありますが、椿の場合、逆光は避けてできるだけ順光、斜光を選びましょう。照り返しが強い場合は、日傘やレフ板等で光を遮っても効果があります。

### 4. レンズの選択

マクロレンズや望遠レンズが便利ですが、標準レンズでもカメラの撮影機能にマクロがある場合はこの機能を使うとぐんと近づいて大きく撮ることができます。

### 5. 記録画質

今回のカレンダー作成で一番困ったのは記録画質の問題でした。印刷会社の技術担当者は想像以上に大きな画質を求めてきます。これからカレンダー用に撮られる場合の記録画質は「Large」「Fine」に設定すればカバーできると思われれます。

### 6. アングル

綺麗な花を見つけたら、正面からだけでなく左右、上下にカメラを動かしてファインダーを覗いてみると、自分の気に入ったアングルが見つかります。



覆輪江戸錦



紀州司



正義

### 7. 背景処理

せっかく綺麗な写真が撮れても、花や葉にゴミがついていたり、背景に邪魔な人工物が写っていると、作品が台無しになります。シャッターを押す前に、もう一度、花の周囲や背景などに邪魔なものがないか確認しましょう。

## 8. 三脚の使用

できるなら三脚を使用して撮ると手ブレが防げます。シャッター速度は手持ちの場合、最低、レンズの長さ以上で撮りましょう。200mm 望遠レンズなら、最低 1/200 秒以上で撮れば手ブレが防止できます。三脚が使えない場合は、樹木の幹や自分の膝などを利用すれば効果があります。

思いつくままに書いてみました。ぜひとも自分のお気に入りの椿に挑戦してください。また、疑問に思う点、わからないことがありましたら、日本ツバキ協会のホームページ「掲示板」で質問していただければ、私が知っている範囲でお答えします。よろしく申し上げます。

掲示板の URL (<http://6626.teacup.com/jcshp20110626/bbs>)

### 2014 年カレンダーのテーマ

今回のテーマは「ふるさとの椿」ですとお知らせしました。「よくわからない」と問い合わせ、苦情をいただきました。2年目のテーマは何にしようかと理事会で議論しましたが、「絶対それだ」という案は出ません。「古木・銘木」という声も出ましたが、それではほとんどヤブ椿の大木で、「花はアップすれば同じようになってしまう」という悩みがあります。当面やはり花を中心に据えて、となり、私が「ふるさとの」と提案しました。

広く考えて下さい。自由に解釈して下さい。皆さんのお住まいの地で、支部で活動されている地元で「これぞおらが国の名花」と誇りにしている品種がありますね。私の頭にまず浮かんだのはそれです。ご出身の故郷の代表的な花はもちろんです。あるいは「心のふるさと」の椿はどうでしょう。特別の思い出がある椿。青春の記憶。強烈な印象を受けた、あの土地のあの花。

それぞれが素晴らしいと思う、大好きな花。「なんだ。何でもいいのか」とお叱りを受けるかもしれませんが、そう考えて下さい。この花にはこんな思い出がある、こんな熱い思いがある、という撮影者の短い文章がつけばさらに味わいが深くなるのではないかと考えています。

(理事・高橋 潤)